

アフガンNGOが シンポで支援訴え

東京、立教大

「アフガニスタンに国際社会はどうかかわるべきか」をテーマにしたシンポジウムが二十九日、東京・池袋の立教大学で開かれた。国際協力NGO「日本国際ボランティアセンター」（東京都、谷山博史代表理事）が主催した。

シンポジウムでは、アフガニスタンから来日中のNGO調整事務所代表代行のサイード・ラヒーム・サター氏が報告。女性や子どもが空爆で殺されたスライド写真を紹介して、「治安悪化と誤爆による民間人被害増で外国軍への不満や怒りが高まっている。軍事的手段ではなく、対話によ

る交渉こそ和平を実現できる」と訴えた。



ノルウェー難民評議会のアフガンニスタン・パキスタン地域代表のニーフ・ムルナガン氏は「60%の人々が一日一ドル以下で生活しているが状況

「380万人が飢餓の危機に直面している」と訴えるアフガニスタンNGO調整事務所代表代行のサター氏（東京・池袋の立教大学

は悪化の一途。五百万人に対する食料援助が必要だが45%しか集まっていない」と指摘。サター氏は「干ばつで三百八十万人が飢餓の危機に直面している」と述べ、国際社会からの食料・人道支援と日本のリーダーシップを期待した。